

(1) 論文の名称 「特殊な合成磁場」の利用技術

(2) 技術の分野

- (a) 上記の交番磁場における「特殊な合成磁場」の使用技術は、磁極の転換点を中心におくことによって対称形の位置に存在する両方の磁力の和がゼロになる合成磁場の技術である。
- (b) 特に燃料油と水と空気で使われる「特殊な合成磁場」の利用技術について説明される。

下記は、「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」ですでに実行された多くの試験結果から導かれた論文である。

- (3) 物質の従来の特性変化と完全に異なる特性変化が「特殊な合成磁場」の利用技術によって発生する理論的な根拠について、
 - (a) 物質が「特殊な合成磁場」を切断する速度の限界について
 - (b) 「ファラデーの電磁誘導論」に基づいている「特殊な合成磁場」の使用技術によると、物質による磁束の切断による磁束密度の変化率が理論的に無限になるので、物質の特性変化は従来技術と科学で考えられないほど成長する。
 - (c) すなわち、燃料油と水と空気が「特殊な合成磁場」によって構成される交番磁場において移動され、そして、「特殊な合成磁場」が切断されるとき、「ファラデーの電磁誘導公式」は適用される。
 - (d) 「ファラデーの電磁誘導公式」によると、公式は $E = - (d\Phi / dt)$ である。但し、アイテム「E」は、物質の原子に誘導される磁気による電子エネルギーであり、そしてアイテム $(d\Phi / dt)$ は磁束の変化率である。
 - (e) さらにまた、上記の「ファラデーの電磁誘導公式」は、永久磁石だけでなく「特殊な合成磁場」を構成している交流電磁石についても同様に適用される。
 - (f) さて、物質が交番磁場に動いて、「特殊な合成磁場」を切るとき、アイテム (dt) の時間は限りなくほぼ0である。
 - (g) したがって、「ファラデーの電磁誘導公式」によれば、アイテム「E」で表される磁気による電子エネルギーは、「特殊な合成磁場」を切断することによって (dt) で表されるゼロに近い時間の間だけ、物質の原子に誘導される無限の大きいレベルの電子エネルギーになる。
 - (h) すなわち、磁気による極限の高いレベルの電子エネルギーが「特殊な合成磁場」を切断することによって物質の原子に誘導されるので、従来技術と科学とは全く異なる物理的な特性は物質の分子に考えられないほど劇的に発生する。
 - (i) さて、物質に特性変化を与えることが出来る「特殊な合成磁場」の切断される時

間に起因する影響は、以下の通りに説明される。

- (j) 「特殊な合成磁場」の物質によって切断されることが徐々に短くなる時物質に誘導される磁気による電子エネルギーは反対に除々増やされる、しかし、最終的に電磁誘導による現象が遅かれ早かれ発生することができない時に達する。
 - (k) したがって、「特殊な合成磁場」の切断される時間が最も短くなる時 (dt_{\min})、磁気による極限の高いレベルの電子エネルギーが発生するので、磁気による最も大きな分子運動エネルギーが物質の分子に発生する。
 - (l) 「特殊な合成磁場」の切断テストによると、(dt_{\min}) で表される時間は分子構造の違いによって変わる。
 - (m) 「特殊な合成磁場」の切断時間が上記の時間 (dt_{\min}) より短いとき、物質の磁気による電子エネルギーは決して発生することができない、その結果、同様に、物質の磁気による分子運動エネルギーもまた決して発生することができない。
- (4) 物質に突出している実用的な安定した物理的に異なる特性変化を発生させるために、以下の3つの条件は同時に満たされなければならない。
- (A) 基本的に第1の条件について、磁気による無限の電子エネルギーが磁束密度の変化率を「ファラデーの電磁誘導手法」によって理論的に無限にするとき、発生する特別な構成磁場 ($d\Phi/dt$) が使われなければならない。
 - (a) 物質は「特殊な合成磁場」によって造られる永久磁石と交流電磁石で構成される交番磁場において動かされて、「特殊な構成磁場」を切断する。
 - (b) したがって、磁極の転換点では物質の原子には電磁気により誘導される磁気による電子エネルギー「E」は無限のエネルギー準位になる、そして、物理的な異なる特性変化は考えられないほど劇的に物質の分子で発生する。
 - (c) さらにまた、「特殊な合成磁場」の使用技術による有用性の見解点から、物質の原子に電磁気によって誘導される磁気による電子エネルギーができるだけ高いエネルギー準位になることが、同様に、磁気による電子エネルギーが同時に物質の原子に電磁気によってできるだけ繰り返し誘導されることが、重要である。
 - (B) 基本的に第2の条件について、物質が「特殊な合成磁場」を移動して、切断するとき、物質の原子に電磁気によって誘導される磁気による電子エネルギーの周期は量子論の定義で磁気量子数で表される電子エネルギーの周期にならなければならない。
 - (a) 交番磁場では、磁極の転換点を中心におくことによって対称形の位置に存在する両方の磁力の追加がゼロになるというわけではない合成磁場が存在するとき、磁極の転換点あたりの左右対称は崩れる、そして、その結果、交互の磁場の合成磁場の位置はズレを生じて、そして合成磁場の周期は不揃いとなる。
 - (b) したがって、永久磁石と交流電磁石で造られる交番磁場における「特殊な合成磁場」の周期が等しくなくて、不揃いになる時、物質の原子に電磁気によって

(3)

誘導される電子エネルギーの周期は量子論の定義で磁気量子数で表される電子エネルギーの周期にならない、そして、物理的な異なる特性変化の程度は非常に低い。

- (c) そのうえ、最初の状態と2回目の状態は、「特殊な合成磁場」によって物質の原子に電磁気によって誘導される磁気による電子エネルギーに関するものである。
 - (d) 以下の3回目の状態は、物質の分子で、磁気によって分子運動エネルギーに関するものである。
- (C) 第3の条件として、物質の分子運動が本来持っている固有振動数の周期が交番磁場を構成している「特殊な合成磁場」を切断することにより磁気による分子運動エネルギーの周期に一致することができるように、物質の移動速度が決定されることは、最も重要である。
- (a) すなわち、物質の分子が上記の3回目の状態を満たすことができる、物質の移動速度によって「特殊な合成磁場」を切断するとき、全く物理的に異なる特性変化が物質の分子運動エネルギーについて大いに突出することができるので、初めて、共振現象が生み出され、そして画期的な効果h発生する事が出来る。
 - (b) さて、永久磁石と交流電磁石での「特殊な合成磁場」は、理論的には、電磁誘導技術の拡張に属していて「ファラデーの電磁誘導手法」に関する技術である、そして、基本的に発電機で、または、誘導電動機で広められた技術である。
 - (c) したがって、最初の条件と2回目の条件と3回目の条件を同時に満たすことができる「特殊な合成磁場」の使用技術によって、全く物理的に異なる特性変化が燃料油と水と空気の分子に考えられないほどもたらされることができ、ので、「特殊な合成磁場」の使用技術が使われることができる、そして、多くの産業の多くの分野において多くの新しい基本的な技術は確立されることが出来る。
- (5) 「特殊な合成磁場」の使用技術による量子論による説明について、
- (a) 「特殊な合成磁場」の使用技術によって、全く物理的に異なる特性変化が従来の技術と科学によって考えられることができないくらい劇的に発生する効果と現象は、以下の通りに説明される。
 - (b) 我々が通常、経験する現象の電子エネルギーは、量子論のエネルギーについて定義において主量子数で表される電子エネルギーである。
 - (c) たとえば、量子論の定義で放射能に起因する電子エネルギーは旋量子数で表される電子エネルギーである、そして、放射能に起因する電子エネルギーの電子の運動の状態は従来の現象に起因する運動の状態と基本的に異なる。
 - (d) したがって、放射能に起因する電子エネルギーが普通の現象に起因する電子エネルギーと基本的に異なるので、従来の現象と放射能による現象は相互に干渉されることができない。

(4)

- (e) 同様に、磁気量子数で表される電子エネルギーに起因する現象が物質に発生するので、「特殊な合成磁場」の使用技術により磁気量子数で表される電子エネルギーによって従来の現象と全く異なる現象が劇的に物理的に発生する事は当然考えられる。
- (f) したがって、「特殊な合成磁場」の使用技術が特に熱機関のために燃料油または空気に使われるとき、燃料消費率の低下の現象と排気ガスの減少現象が従来の熱機関技術と科学で考えられないほど劇的に発生することは当然の結果である。

「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」で上記の論文の根拠となった試験結果は、以下の通りに説明される。

- (6) 上記の走行テストの結果に基礎をおくことにより「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油による熱機関の効果は、以下で説明される。

- (a) 走行テスト結果は「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」で熱機関の走行テストで提供されたテスト結果によると、従来の燃焼による爆発的な熱膨張圧力だけでなく先行される熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発的な気化膨張圧力も例外なく多くの種類の熱機関のシリンダーの内部で発生したということをはば証明する多くの現象は、すでに発生した。
- (b) したがって、熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発的な気化膨張圧力が熱機関の多くの走行テスト結果によって発生したということを実証する結果と現象は、各々A項とB項とC項とD項とE項で以下の通りにリストアップされる。

A項：熱機関の燃料消費の減少率について、
「第1章の詳細」における第1節と第3節と第5節および第11節について

- (a) 第1節：日本自動車輸送技術協会：社団法人」による「Eco オイラー」の厳密な走行テストについて、
- (b) 第3節：「徳島産業短期大学」による「E オイラー」による走行試験のデータについて、
- (c) 第5節：「早稲田環境研究所の会社」による道路上の「E オイラー」によるディーゼルエンジン車の厳しい走行テストについて
- (d) 第7節：LP ガス車の道路上の走行試験のデータと「港タクシー社」（那覇市、沖縄）によるLP ガス車の走行試験について
- (e) 第11節：「トランスマスター」装置による「第3住若丸」（2,700 HP）の主エンジンの航行テストについて
- (f) さて、多くの他の熱機関での「特殊な合成磁場」の使用技術の燃料油によれば、「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」ですでに記録されて

(5)

いる熱機関の走行テストによる多くの走行試験結果2,000以上は、ほぼ等しい走行テスト結果になった。

- (g) 上記の様に、当然熱機関の厳しい走行テストによれば、燃料消費の減少率は完全にゼロでなければならないけれども、大きい10%~20%の燃料消費の低下率は例外なく従来の熱機関技術と科学によって考えられることができないくらい大いに熱機関の種類に、そして、熱機関の燃料油に関係なく既にすでに発生した。

B 項：ディーゼルエンジンの排気ガスの温度低下について

- (a) 「第1章の詳細」の第12節：
第12節：船舶の航行テストについてのエンジンデータの説明
- (b) したがって、排気ガスの温度の14℃の大きい減少数値は、「トランスマスターA」装置によってテスト船の「第3住若丸」の試験結果によって達成された。

C 項：ディーゼルエンジンの騒音と振動の低下について

- (a) 「第1章の詳細」の第9節
大型トラックの道路上の走行テストのデータについて
- (a-1) ドライバーの意見：エンジン音は大きく低下した。
- (b) 第12節：テスト船の航行テストについてのデータの説明
- (b-1) 指示計の指針が「特殊な合成磁場」の使用技術によってテスト船エンジンで重油「A」を使うに際して停止状態になったので、テスト船での指示計の指針によって正確に指示計における最も小さな単位の1/10を読むことができることが可能になった。
- (b-2) したがって、爆発的な熱膨張圧力に先行して熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発的な気化膨張圧力の発生によって、ピストンに押し下げる圧力は平均値になって、大いに減少する、そして、その結果、振動とエンジンの雑音は劇的に減少する。

D 項：エンジンオイルの寿命の劇的増大について

- (a) 熱機関のシリンダーの内部の燃焼温度が例外なく減少したので、ピストンに与えられた押し下げる圧力は大きく減少した、そして、その結果、エンジンオイルの悪化と汚れの程度は大いに減少した、そして、エンジンオイルの寿命は劇的に延長された。

E 項：「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油が使われ、そして、既存の熱機関での点火タイミングと噴射タイミングがあまりに早いとき、異常音と振動が既存の熱機関で生じるといった状態が発生する。

- (a) すなわち、ピストンが押し下げられるタイミングが従来の燃焼による爆発的な熱膨張圧に先行して熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発

(6)

的な気化膨張圧力の発生により既存の熱機関の従来のタイミングより早くなるので、強く押し下げることによる圧力がピストンに加えられるタイミングのスタートはより早くなりそして、その結果、制動作用が発生する。

- (b) したがって、上記の制動作用によって、エンジンの爆発工程においてクランクシャフトにすでに蓄えられた回転慣性エネルギーが大いに消費されるので、大きいエネルギー損失の起こることに起因する異常音と振動が既存の熱機関で発生する、そして、その結果、燃料消費の大きい増加は、同時に発生する。

F 結論について

- (a) 上記のA項とB項とC項とD項とE項の各々の走行試験結果と現象によって、爆発的な熱膨張圧力に先行して熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発的な気化膨張圧力が「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油によって熱機関のシリンダーの内部における燃焼において発生したということが証明された。
- (7) 温度上昇が伴わない粘性の低下に起因する「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油に蓄えられる磁気による分子運動エネルギーの推定について、
- (a) たとえ従来の燃料油の加熱による粘着性低下状態ができる限り減少される事ができるとしても、従来の燃料油の加熱による粘着性低下状態が「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油の粘着性低下状態まで減少することは、全く不可能である。
- (a-1) したがって、「特殊な合成磁場」の使用技術により燃料油に与えられる熱を発生させることのない新しい未知の磁気による爆発的な気化膨張圧力に起因する磁気による分子運動エネルギーは想像力を遥かに上回る大きい熱エネルギーに相当する運動エネルギーであると説明されることが出来る。
- (b) 「特殊な合成磁場」の使用技術による軽油と重油「A」の利用状態について、
- (b-1) 軽油と重油「A」のこの劇的な粘着性低下による試験結果によると、軽油と重油「A」の浸透能力が考えられないほど劇的に増加したので、日本工業規格（JIS）によるボール弁の開閉能力が完全に機能することができない現象が発生した。
- (b-2) 同様に、テスト船の「第3住若丸」の予備タンク（1,000リットル）に保存された重油「A」に関しては、日本工業規格（JIS）によるギアポンプが「トランスマスター」装置に重油「A」を送るために使われたとき、重油「A」が十分に機能することができなかつたシール機能に起因するギアポンプの出力軸から外に漏れる現象が発生した。
- (8) 「特殊な合成磁場」の使用技術による熱機関のエンジンから排出される有害排気ガスについて
- (a) 従来は、まだ燃え尽きなかつた燃焼ガスが放出されたあと、排気ガスは空気によって冷やされる、その結果、炭化水素（HC）または一酸化炭素（CO）または酸化窒素（NOx）またはマイクロ粒子状物質（PM2.5）のような有害ガスが空中

に発生する。

- (b) しかし「特殊な合成磁場」の使用技術による燃料油によれば、磁気による爆発的な気化膨張圧力が基本的に発生するので、すべての有害な排気ガスは熱機関のシリンダーの内部の燃焼においてほとんど完全に焼え尽くされる。

(9) 「特殊な合成磁場」の使用技術による微小粒子状物質 (PM2.5) の低減について

- (a) 熱を発生させることのない磁気による新しい強い未知の爆発的な気化膨張圧力が熱機関のシリンダーの内部の燃焼において発生するので、燃料油はほとんど必然的に分子サイズにまで再分割される。
- (b) したがって、まだ焼き尽くされなかった燃焼ガスに起因する排気ガスにおける従来の微小粒子状の物質 (PM10 と PM2.5) だけでなく従来の微粒子状物質 (PM2.5) より小さな微粒子状物質も一緒に大いに減少すると考えられる。

(10) 「特殊な合成磁場」の使用技術による二酸化炭素 (CO2) の減少について

- (a) さて、フィルターまたは触媒または尿素 SCR システムによる従来の熱機関の排気ガスの処理技術は有害な排気ガスを無害処理することによって環境汚染を防止する能力だけを有している、しかし、フィルターまたは触媒または尿素 SCR システムには熱機関で燃焼効率を上げることによって燃料消費の量を減少させる能力はない、従って、発生する二酸化炭素 (CO2) の量は全く減少しない。
- (b) 「特殊な合成磁場」の使用技術が現在で世界中で広く従来の熱機関において燃料油のために使われるとき、フィルターまたは触媒または尿素 SCR システムを製造する事によって、そして、利用する事によって消費される膨大な量のエネルギーつまり、二酸化炭素 (CO2) の膨大な量は完全に不必要なエネルギーになる。
- (c) さらにまた、「特殊な合成磁場」の使用技術が排気ガスの処置技術に使われるとき、(b) 項のエネルギーの膨大な減少量は今はすでに開発された「E オイラー」を用いて 10% ~ 20% の燃料消費の減少率に相当する大きいエネルギーに加えられるので、エネルギーのすべての節減量が測り難い。
- (d) したがって、巨大な経済的な効果だけでなく二酸化炭素 (CO2) の莫大な減少量も、きっと達成されるに違いない。

(11) 「特殊な合成磁場」の使用技術による窒素酸化物 (NOx) の低減について

- (a) そのうえ、熱を発生させることのない磁気による新しい未知の爆発的な気化膨張圧力が発生するので、「特殊な合成磁場」の使用技術の燃料油によれば、燃料消費は大いに減少する、そして、その理由により、熱機関のシリンダーの燃焼温度は大いに減少する、したがって、酸化窒素 (NOx) もまた同時に大いに減少することができる。

(12) 「特殊な合成磁場」の使用技術によって水と空気に起因する環境の改善の効果について、

(8)

- (a) 「特殊な合成磁場」の使用技術による水と空気によれば、いろいろな化学薬品による従来の環境汚染の拡大は、きっと効果的に制限されることができて、きっと基本的に新しい物理的に異なる見解点から、全く新しい特性変化によって大いに改善されることができる。
 - (b) 電磁誘導によって酸素原子に誘導されることによって発生した磁気による酸素分子の運動エネルギーに起因する酸化機能は、従来の酸素分子の酸化機能と、基本的に物理的に全く異なる。
- (A) 水の酸化還元電位 (ORP) の劇的な低下について、
「第3章の詳細」の第3節
- (a) 「トランスマスター」装置による「特殊な合成磁場」の使用技術による水による酸化還元電位 (ORP) における変化のデータについて、
 - (a-1) 「特殊な合成磁場」の使用技術による上記の水のテスト・データによると、水の酸化還元電位 (ORP) の 180mv の数値は、従来の水について存在しない数値である。
- (B) 「特殊な合成磁場」の利用技術による水や空気による環境改善について
「第3章の詳細」の第4節
- (a) 従来の化学薬による環境汚染は、「特集合成磁場」の使用技術による水または空気によって従来の特性とは物理的に劇的に異なる特性変化によって防止されることができる。
 - (a-1) たとえば、有機廃棄物からエタノールは、「特殊な合成磁場」の使用技術による水または空気によって簡単に生産されることができる。
- (C) 「トランスマスター」装置による水道水の一般的なバクテリアに対する殺菌効果のテストについて、
「第3章の詳細」の第5節
- (a) 「トランスマスター」装置が給水において使われなかったとき、一般的なバクテリアの数は24個/mlであった、そして、「トランスマスター」装置が給水において使われたとき、一般的なバクテリアの数は2個/mlまで減少した。但し、上記の「トランスマスター」装置への通過回数はそれぞれ1回であった。
- (D) 「特殊な合成磁場」の使用技術による水がコンクリートのために使われるとき、
「第3章の詳細」の第6節
- (a) 特に、コンクリートの強度は水の粘性が「トランスマスター」装置で劇的に減少したコンクリートの水として使われることにより増やされることができる、そして、同様に、コンクリートの寿命は長くなることことができる、そして、同様に、コンクリートのための工事期間はコンクリートの凝結速度の増加によって短くなることことができる、そして、同様に、コンクリートの二次製品のための「水を減少させる薬」は減少することことができるか、完全に省略されることができる。
- (E) 「特殊な合成磁場」の使用技術による空気による「電磁空気清浄器」の特性と効果

について

「第3章の詳細」の第12節

- (a) 特に「第3章の詳細」の第12節の試験結果から、殺虫剤または殺菌剤または接着剤または殺菌剤のような薬に起因するホルマリンまたはクレゾールまたはトルエンまたはシンナーの強烈な危険なイライラさせる臭いは、「特殊な合成磁場」の使用技術による、空気によって取り除かれることができる。

「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」で多くの試験結果によって改善されなければならない「特殊な合成磁場」の使用技術による新技術による見通しの一部は、以下の通りに説明される。

- (13) 「特殊な合成磁場」の使用技術によって燃料油と水と空気の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」を決定する方法について、
- (a) 「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」で記録された試験結果によると、物質が「特殊な合成磁場」を切断するとき、最も効果的な独特な速度がある速度幅を持っていることは、明白になった。
- (b) また、「特殊な合成磁場」を切る事による周期が燃料油または水または空気が各々を持っている固有振動数の周期と一致するとき、ある一定速度は燃料油の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」として表される。
- (c) したがって、燃料油または水または空気の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」は、以下の通りに説明される。

(A) 燃料油について

- (a) さて、非接触型の速度計は燃料ホースの内部に流れている燃料油の速度を計るために燃料ホースの外径の上に付けられる、同様に、出力計付きの発電機は負荷のために直接テスト熱機関の出力軸に接続される。
- (b) この場合、テスト熱機関はシャシー動力計で運転される、そして、エンジンへの燃料供給はシャシー動力計でアクセラレータを押し下げることで順番に増やされる。
- (c) 発電機の出力は、燃料ホースの内部にずっと流れている燃料油の通過速度のいろいろな変更について測られる。
- (d) 次に、燃料油の各々の通過速度と発電機の出力は1対のデータとみなされる、そして、燃料油の通過速度は水平軸で示され、そして、同様に、発電機の出力は垂直軸で示される、そして、グラフは同時に製作される。
- (e) この場合、熱機関に供給される燃料油の量が通過速度の増加に従って増加するので、発電機の出力は一緒に増加する傾向を示す。

- (f) 上記の様に、発電機の近隣の出力の上昇率より突出する出力の上昇率が発生するとき、突出する出力の上昇率と一致する燃料油の通過速度は燃料油の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」として決定される。

(B) 水について.

- (a) この場合、たとえば、酸化還元電位（ORP）が水の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」の決定の手段として使われる。
- (b) また、水がある一定の通過速度とともにホースの内部を通過し、そして、ある一定の通過速度に起因する水の酸化還元電位（ORP）の低下が最大限になるとき、水の固有振動数に起因する共振現象が発生する。
- (c) したがって、上記の水のある一定の通過速度は、水の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」として決定される。

(C) 空気について.

- (a) この場合、たとえば、センサーによるニンニクのおいが、空気の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」の決定の手段として使われる。
- (b) そのうえ、空気がある一定の通過速度とともにホースの内部を通過し、そして、ある一定の通過速度によるニンニクのおいの強さが最大限になるとき、空気の固有振動数に起因する共振現象は発生する。
- (c) したがって、上記の空気のある一定の通過速度は、空気の「最も効果的な合成磁場を切るための速度」として決定される。

(14) 「特殊な合成磁場」の利用技術の拡大について

- (A) 「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」ですでに実行された「特殊な合成磁場」の使用技術の燃料油による熱機関の走行テストの条件の改善について、
- (a) 熱機関の走行速度の変化によって燃料ホースの内部を通り抜けている燃料油の速度は、大いに変わるにも拘らず上記の走行テストは、「合成磁場を切断するための最も効果的速度」であると考えられる1種類の限られた速度だけについて、行われた。
- (b) 従って「特殊な合成磁場」の使用技術が制限的に使われたので、「Eオイラー」による燃料消費の減少効果は制限的に現れざるを得なかった。
- (c) 「Eオイラー」装置の内部を通り過ぎていく燃料油の速度が複数の速度に変わるとき、燃料油の速度が自動的に「合成磁場を切るために最も効果的速度」に変えられることができるように、「合成磁場の流体の速度制御装置」はすでに開発された。
- (d) 「特殊な合成磁場」のより高い使用技術による熱機関の燃料油によると、燃料消費と、排気ガスの減少効果が「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3

章の詳細」ですでに証明された効果を確実に完全に上回る筈であるので、従来の熱機関は有益な革命的な熱機関として再生することができる

- (e) 上記のように、「特殊な合成磁場」の使用技術は、今日基本的に世界的な要請となっている「エネルギーの確保と二酸化炭素 (CO₂) の減少」の 2 律背反の難題を解決することができる新しい画期的な技術である。
- (B) 「特殊な合成磁場」の使用技術による希硫酸の電解質に起因する蓄電池によるエネルギー革命の可能性について
- (a) 鉛蓄電池のテストは、下記のように実行された。
すなわち、希硫酸の電解質がチューブによって鉛蓄電池の外に取り出されたあと、希硫酸塩の電解質は「E オイラー」による「特殊な合成磁場」を切断する。そして、最後に、希硫酸の電解質は鉛蓄電池に返される
 - (b) この時の試験結果によると、鉛蓄電池の出力電圧が少し上昇した現象が起こった。
 - (c) しかし、電流が鉛 (Pb) と二酸化鉛 (PbO) の電極に流れなかったけれども、「特殊な合成磁場」の使用技術による磁気による電子エネルギーが引き金になったことは明白である、
 - (d) すなわち、同じ化学反応が鉛蓄電池の鉛 (Pb) と二酸化鉛 (PbO) の電極と希硫酸の電解液によって構成される活性物質に発生したと考えられる。
 - (e) さて上記の複数個の「新しい充電システムによる新しい鉛蓄電池装置」が自動的に絶え間なく順番に負荷のために運転されることができれば、「新しい充電システムによる新しい鉛蓄電池装置」は考えられない理想的な発電機として実質的に機能するかもしれない。
 - (f) 上記の「新しい充電システムによる新しい鉛蓄電池装置」は、すべての既存の熱機関や人々の人生の電源として使われることができる究極の発電装置になるかもしれない。
 - (g) しかし、鉛蓄電池の中の希硫酸のテストに関しては、問題なく鉛蓄電池の全面的なテストを実行することができる希硫酸の電解質の安全な循環装置の状態が作られる事ができるまで、テストを維持するために発生する危険の大きい可能性があるので、テストの進行をテストの進捗をかつて停止した経緯がある。
 - (h) しかしながら今日、「特殊な合成磁場」の使用技術により従来の鉛蓄電池を利用した「新しい充電システムによる新しい鉛蓄電池装置」は、開発される可能性は大きい。
- (C) 「特殊な合成磁場」の使用技術による水と空気によるバクテリア (生きもの) に対する効果について
「第 3 章の詳細」の第 4 節
- (a) 「第 3 章の詳細」のテストにより、水と空気による「特殊な合成磁場」の使用技術によれば、好気性バクテリア (生きもの) は自動的に選択的に大いに育て

(12)

られたことが、そして、嫌気性バクテリア（生きもの）は同時に自動的に選択的に厳しく抑制されたことが、明白になった。

- (b) したがって、「特殊な合成磁場」の使用技術による水と空気によれば、磁気による電子エネルギーによる医学的効果は従来の医療技術である物理的な放射線エネルギーの効果と基本的に物理的に異なるので、治療効果は基本的に従来の治療効果と異なる。
- (c) 上記の新しい革命的な医療技術は考えられないほど従来の医療技術と異なる劇的な治療効果を示すかもしれない。

(15) 「特殊な合成磁場」の使用技術の構成の説明について、

(A) 永久磁石により構成される「特殊な合成磁場」について

- (a) 図1は「磁石列」(1)と交流電磁石での磁気波形の略図である、点“z”は特に磁極の転換点を示す。
- (b) アイテム(α)は、「磁石列」(1)を構成している交番磁場における「特殊な合成磁場」の周期である。
- (c) 「磁石列」(1)は、図2で「特殊な合成磁場」によって構成される。
- (d) 物理的に従来の特性とは劇的に全く異なる特性変化が「特殊な合成磁場」を切断することによって発生することができる材料は磁気材料を除き分子構造を持っているすべての材料である。
- (e) しかし、「特殊な合成磁場」の使用技術は、特に以下の通りに燃料油と水と空気について説明される。
- (f) 図2において、「特殊な合成磁場」は、両方の異なる磁極で直接接触することによって構成される転換磁場に対称形の位置に存在する両方の磁力の和が交番磁場において各々0になる合成磁場である。
- (g) したがって、非常に高水準の電子エネルギーが燃料油と水と空気の原子に電磁誘導によって誘発されて、原子を高エネルギーにするので、「磁石列」(1)を構成している「特殊な合成磁場」によれば、物理的な異なる特性変化が従来の技術と科学によって考えられることができないくらい劇的に燃料油と水と空気の分子に生み出されることができるとは確実にあり得る。
- (h) さて、図2の中で、「磁石列」(1)の「特殊な合成磁場」は、永久磁石のN極の主磁束側(2)の表面と永久磁石のS極の主磁束側(3)の表面で直接接触している表面によって構成される。
- (i) 「磁石列」(1)はそれぞれ等しい形と等しいサイズと等しい磁束密度を持っている永久磁石によって構成される、そして、互いに引きつけられる極による永久磁石は一列に置かれる。
- (j) アイテム(5)は「磁気遮蔽板」である。

(13)

- (k) 「磁石列」(1)と「磁気遮蔽プレート」(5)が互いに引きつけられるとき、また、等しい交番磁場は「磁気遮蔽プレート」(5)の背側表面に発生する。
- (l) この場合においては逆の方向の磁束密度が「磁気遮蔽板」(5)の内部で理論的に完全に相互に打ち消されるので、少しの磁束密度も「磁気遮蔽」(5)の外側に漏れることができない。

(B) 交流電磁石により構成される「特殊な合成磁場」について

- (a) 図3は、交番磁場で「特殊な合成磁場」を利用する交流電磁石の略図である。
- (b) 通常、過負荷がAC電源に発生しない限り、交流電磁石で構成される「特殊な合成磁場」のサイクル(α)がAC電源における周波数自体であるので、周波数は常に自動的に固定数値で決定される。
- (c) さて、「切断面」(7)は「四角形の鉄のフレーム」(6)の一辺だけで、作られる。
- (d) 「銅線が巻かれた一次コイル」(8)の銅線は、「糸巻」(10)の外面に巻付けられる。
- (e) 恰もトランスにおける二次コイルのように、プラスチックチューブ(9)は「銅線が巻かれた一次コイル」(8)の上に積み重ねられる状態で一度だけ巻かれて、構成される。
- (f) 「プラスチックチューブ」(9)の内部に流れている燃料油または水または空気の原子に電磁誘導によって誘導される磁気による電子エネルギーがトランスの構造による効果によって大きくされるので、燃料油または水または空気の磁気による分子の運動エネルギーは大いに拡大されることができる。
- (g) そのうえ、「プラスチックチューブ」(9)は、「四角形の鉄枠」(6)の一辺の中心部に切断された両方の「切断面」(7)の間に埋設される。
- (h) 上記のように、特に燃料油と水と空気について、「オイラー」は1対の「磁石列」(1)によって構成される製品であり、従来の技術と科学によって考えられることができないくらい劇的に物理的に異なる特性変化を生じることができる装置である。
- (i) また、特に燃料油と水と空気について、「トランスマスター」装置は交流電磁石によって構成される製品で、考えられないほど全く物理的な異なる特性変化を生じることができる装置である。

(16) 「第1章の詳細」と「第2章の詳細」と「第3章の詳細」で多くのテストですでに使われた「特殊な合成磁場」を構成する永久磁石と電磁石の条件について、

- (A) 特に、「磁石列」(1)の上で、燃料油と水と空気の進行方向に沿った永久磁石の幅の寸法の、そして、Nd-Fe-B 磁石の磁束密度の不平等による幅は、以下の通りに説明される。

(14)

- (a) 燃料油と水と空気による「磁石列」(1)の上の進行方向に沿って、ネオジ磁石の寸法は3ミリメートルの幅である。そして寸法の精度はほとんど±0.1ミリメートルである、したがって、永久磁石の幅の寸法の不平等による幅は3.3%の数値である。
 - (b) さらにまた、ネオジ磁石の磁束密度は 470 ± 2 「mT」である、したがって、磁束密度の寸法の不平等による幅は0.24%の数値である。
 - (c) 具体的には、永久磁石の不平等の率が大きいとき、「特殊な合成磁場」を構成している両方の異なる磁極による接触面の転換点が集められるという面は曲げられる。
 - (d) したがって、曲げられている面が相互に干渉するので使われる永久磁石による不平等の率が大きいとき、「特殊な合成磁場」の使用技術の機能の大きい低下の原因となる。
- (B) 「特殊な合成磁場」の使用技術による交流電磁石で大きい効果は、説明される、
- (a) 通常、日本では商用電源における周波数変動率については0~-15%が許容されている。
 - (b) しかし、商業電力供給の場合、Nd-Fe-B磁石の幅寸法のバラツキの率の3.3%の数値と等しいと仮定するならば、商業電力供給の周波数のバラツキの数値はわずか2サイクルである。
 - (c) したがって、商業電力供給の場合、バラツキの率の3.3%の数値以下で抑制されるならば、物理的に異なる特性が燃料油と水と空気に従来の技術と科学によって考えられることができないくらい劇的に発生することができると当然に考えられる。
 - (d) すなわち、商業電力供給の過負荷による、電圧降下の防止と周波数の安定性は多分「トランスマスター」装置の使用の間、必要である。

(17) 「特殊な合成磁場」の構成図面

図1：磁気波形の模式図

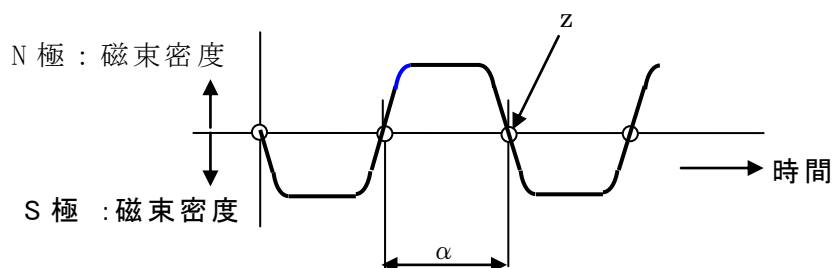


図 2 : 永久磁石による「磁石列」(1) の平面図

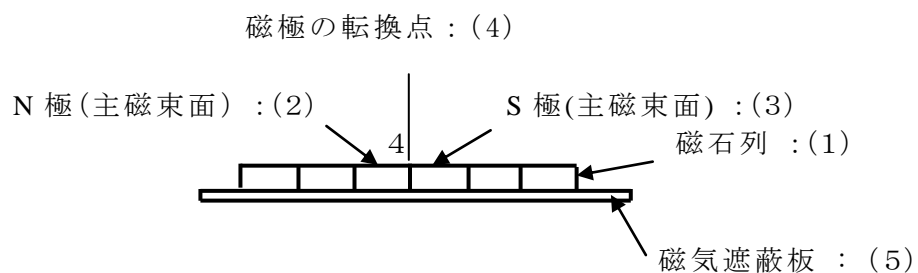
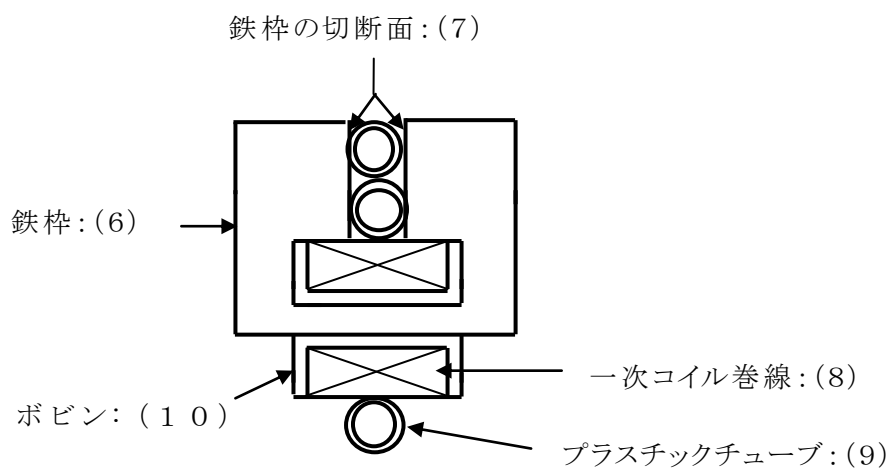


図 3 : 交流電磁石の構成図



(1 8) 「特殊な合成磁場」の利用技術における参考文献

参考文献 1 : 第 1 章の詳細

参考文献 2 : 第 2 章の詳細

参考文献 3 : 第 3 章の詳細

以上

9 2 9 - 1 1 7 1

石川県かほく市木津二 1 6 0 - 2

米出 達雄

メール : wxdxn7493000@ybb.ne.jp

ホームページ : URL : <http://www.vaporization-energy/>

